

火炎の叫び

邪推

春日信彦

二股

署のトイレで伊達刑事とぼったり出くわした沢富刑事は、話があると伊達に耳打ちされ、仕事が引けると自宅に呼ばれた。二人は、博多署近くのパーキングに止めていたブルーのハスラーに乗り込むと伊達のマンションに向かった。ハスラーで通勤するようになった沢富は、時々、伊達をマンションまで送っていた。沢富は、かわいいハスラーのハンドルを握ると、能天気なほどニコニコ顔になった。また、かわいいハスラーのおかげで美緒とデートができるようになったと思った沢富は、ハスラーを縁結びの神様のように思っていた。

助手席に腰掛けた伊達は、ボロを出すかもしれないとほんの少し期待して、ハスラーを乗るようになってご機嫌になった沢富にちよっとカマをかけてみた。「おい、最近、機嫌がいいじゃないか。何かいいことでもあったのか？」沢富は伊達夫妻にばれるとまずいと思い、美緒とのデートは極秘にしていた。デートと言っても、あくまでも情報収集をするためのデートであって、決して男女の恋愛ではないと自分自身に言い聞かせていたが、後々、このデートが自分の首を絞めることになるとは、夢にも思っていなかった。

「いや、何と言うか、ハスラーに乗るようになって、運がいいというか、どういうわけか、いろいろと、いいことがあるんですよ。そう、そう、つい最近、宝くじが当たったんですよ」ハスラーでJKとデートをしていることを知っていた伊達は、話をそらそうとしているわざとらしい沢富を横目でちらっと覗いた。「宝くじね～、サワが宝くじをかうとは、初耳だ。いくら当たったんだ？」

沢富は、とっさに、でまかせを言った。「1万円です。僕にとっては、大金ですよ。伊達さんは、当たったことありますか？」伊達は、でまかせを言っていると思ったが、今ここでデートのことを問い詰める気はなかった。問い詰めるには、ナオ子の協力が必要だと思ったからだ。「俺は、ないんだな～。どうも、クジ運が悪いと言うか、賭け事で勝った事がない。マージャンもパチンコも競艇も競馬も、勝った事がない。サワは、強運なのかもしれん」

沢富は、ちょっとお世辞を言ってさらに話をそらすことにした。「そうですか、いい奥さんをゲットしてるじゃないですか。宝くじ以上じゃないですか。うらやましいな～」沢富は笑顔を作って伊達をチラッと横目を見た。「おいおい、口がうまくなったじゃないか。ハスラーに乗ると、お世辞まで上手になるのか。自分で言うのもなんだが、本当にいいカミさんをもらったよ。今あるのも、カミさんのおかげだ。サワも早く身を固めろ。男は、結婚して、初めて、一人前だからな」

結婚と聞いた沢富は、極秘のデートがばれると、とんでもないことになると思い、この場は素直に返事することにした。「やっぱ、男は、結婚ですかね。僕は、一刻も早く、ひろ子さんと結婚したいと思っています。でも、ひろ子さんの気持がはっきりしないんです。どうすればいいですかね」伊達は、二股をごまかすために調子のいいことを言っていると思ったが、結婚に前向きのところがあると思い、話をあわせることにした。

腕組みをした伊達は、二股がばれてひろ子との結婚がぶち壊れないうちに、一刻も早く結婚させようと語気を強めて気合を入れた。「そうだ。一刻も早く結婚しろ。結婚すれば、きっと、明るい未来が開ける。俺に任せろ。ひろ子さんの気持ちを聞いてやる」沢富は、マジな顔つきでうなずき、美緒とのデートがばれませんように、と心の奥底で手を合わせて祈った。そのとき、背筋がぞっとする不安が心臓をギュッと締め付けた。

マンションに到着すると地下駐車場にかわいいハスラーを休ませ、エレベーターで5階に上がった。いつものように大声でナオ子に叫んだ。「帰ったぞ～～」二人が、キッチンテーブルの椅子に腰掛けるとナオ子が笑顔でビンビール、ノンアルコールビール、おつまみのチーズと枝豆をグリーンのトレイに乗せて運んできた。「お疲れ様。今日も暑かったでしょう。初夏の気温だったわ。あなた、重大な話って、どんな話。まさか、サワちゃんの婚約発表？」

伊達は、苦虫をつぶしたような表情で答えた。「確かに、サワに関する話だが、ちょっと、まあ、聞きたいことがあって、サワを呼んだってわけだ」沢富は、なんとなく嫌な予感がした。「え、僕に、どんなことを？」伊達は、怪訝な顔で突っ立っていたナオ子を自分の左横に座らせた。「まあ、とにかく、一杯のもう。話はそれからだ」ナオ子は夫のグラスにビールを、沢富のグラスにノンアルコールビールを注いだ。最後に自分のグラスにビールを手酌で注ぐと笑顔で沢富に向けた。夫婦の以心伝心からか、伊達は暗い話になってはいけないと思い、笑顔を作って乾杯の音頭をとった。

「今日一日、お疲れ様でした。カンパ〜〜イ」三人のグラスがキスをすると、カキ〜〜ンと心地よい音色が部屋中に響き渡った。早速、一口飲んだナオ子は、声をかけた。「あなた、どんな話？もったいぶらないで、早く〜」伊達は、返事をせず、いったん下ろしたグラスを持ち上げて、突然マジな表情になると残りのビールを飲み干した。そして、ナオ子の顔の前にグラスを差し出した。ナオ子は即座にビールを注ぎ、じっと、早くおっしやいよと言わんばかりの目つきで夫の顔を見つめた。

沢富は、伊達の表情を見ていると不吉な予感がますます心の奥底で大きくなった。二股が発覚してしまったのではないかと思った瞬間、沢富はうつむいてしまった。うなだれた沢富をグイッとにらみつけた伊達は、静かな口調で尋ねた。「サワ、できれば、嘘であってほしいんだが、ハスラーにJKのような若い女性を乗せて、楽しそうにサンセットロードを走っているところを見た、というやつがいてな。その話は、本当か？」

ナオ子は、今にも飛び出さんばかりに目をむき出して悲鳴を上げた。「ヒェ〜、まさか、嘘でしょ、サワちゃん。ひろ子さん以外の女性と付き合っているってこと？そんなことって、嘘よね」沢富は、何と言って弁解しようかと言葉を探していた。顔を持ち上げた沢富は、今にも泣きだしそうな表情で小さな声で話し始めた。「申し訳ありません。確かに、JKを乗せました。でも、決してデートではありません。それだけは信じてください」

ナオ子はあきれた顔で尋ねた。「いったい、そのJKは誰よ。ひろ子さんに何と言って説明するの。正直におっしゃい」伊達は、やっぱり本当だったのかと腕組みをしてうなずいた。「でもな～、JKを助手席に乗せて、デートではなかったとは、虫がいいんじゃないか。一体誰なんだ。まさか、エンコウじゃ～、ないだろうな」沢富は、即座に顔を左右に振った。「違います。エンコウだなんて」

伊達は、取調室で被疑者を問い詰めるときのような目つきで沢富をじっと見つめ、さらに追い討ちをかけた。「だったら、いったい誰だ。いつから、付き合ってるんだ。洗いざらい、白状しろ」夜叉のような目つきになったナオ子は、女デカになったかのように尋問し始めた。「その女の名前は？年齢は？どこで知り合ったの？さ～、さっさと白状しなさい。死刑にしてやる」

あまりの過激な言葉に伊達は、ドン引きしてしまった。「おい、そう、有罪と決め付けちゃいかん。じっくりと話を聞いてからだ。ナオ子、落ち着け」伊達は、ナオ子の右肩をポンとたたいた。興奮を抑えたナオ子は、ドスのきいた低い声でやんわり話を続けた。「分かったわよ。サワちゃん、聞かしてちょうだい、正直に話すのよ」額から脂汗をにじませていた沢富がナオ子と目を合わせると、今にも包丁を持ち出さんばかりの表情でにらみつけていた。

沢富は、いつでも逃げ出されるような態勢で話し始めた。「奥さん、洗いざらい、正直に話します。そのJKは、栗原美緒といいます。彼女は、ある事件にかかわっていたと見られるタクシー運転手の娘です。私は、その子から情報を取るために付き合っています。でも、決して、恋愛じゃありません。分かっただけですか？許してください。お願いします」沢富は、ペコペコとナオ子に頭を下げた。

美緒と聞いた伊達刑事は、不自然な病死をした運転手のことを思い出した。「そうだったのか。あの子か。でも、運転手は病死ということで、かたがついている。もう、これ以上、首を突っ込まないほうがいい。ひろ子さんに誤解されると、厄介なことになる。も～、あの子とは付き合うな、いいな」ナオ子は、じっと聞き耳を立てていた。「たとえ、仕事とはいえ、JKとデートのような真似は、もってのほかじゃない。ひろ子さんが知ったら、何と言うか」

伊達も腕組みをしてうなずいた。「そうだ。そんな言い訳は通用しない。JKと楽しそうにドライブしていたというじゃないか。どう見ても、デートじゃないか。どう説明するんだ。ひろ子さんが、そんな言い訳で、納得すると思うのか」ナオ子は、JKとのデートが知れて、結婚話が破談になるのではないかと不安になった。仲人がだめになるんじゃないかと思うと、怒りがこみ上げてきた。

ナオ子は、目を吊り上げると強い口調で命令した。「金輪際、そのJKとは付き合っははいけません。たとえ仕事でも、ダメです。いいですね」ここまで大事件になると思っていなかった沢富は、土下座して謝ることにした。ずっと椅子から立ち上がるとフロアに正座し、頭をゆっくり下げると額をフロアにこすり付けて謝った。「金輪際、彼女とは会いません。申し訳ありませんでした」

ナオ子は、ほんの少しほっとしたが、このことがひろ子に知られているのではないかと不安になった。「サワちゃん、分かったわ。反省したみたいね。改心すれば、それでいいのよ。さあ、腰掛けて。でも、このことは、ここだけの秘密。そう、あなたにそのことを教えてくれた方にも、口止めしてよ。心配だわ」ナオ子は、このことがひろ子にばれてないことを神に祈った。

「サワ、二度と彼女とデートするんじゃないぞ。万が一、ひろ子さんに見られたら、取り返しのつかないことになる。いいな、肝に銘じて、約束を守るんだぞ。仲人ができなくなったら、出世の夢は、水の泡になってしまう。頼むな、サワ」さっきの剣幕は、出世のためかと思うと、土下座したのがあほらしくなったが、ひろ子に誤解されないためにも、ハスラーで美緒とドライブしない決意をした。

「本当に、ご迷惑をおかけしました。ひろ子さんにこのことが知られていなければいいのですが。本当に、馬鹿なことをしてかしました。ごめんなさい。ごめんなさい」沢富は、頭をペコペコ下げて、改めて伊達夫妻に謝罪した。この場はどうにか収まったが、美緒に今後のことをどのように話をすればいいか考えると、気持はブルーになってしまった。情報収集とはいえ、デートで美緒の恋愛感情を煽ってしまったことは、取り返しがつかないことをしてかしたと思った。美緒の笑顔が眼に浮かぶと、地獄に突き落とされる思いになった。

ナオ子は、とにかく仲人を成功させて、夫の警察署長を実現させたかった。「サワちゃん、誰にも過ちはあるわ。でも、改心すればいいのよ。今回のことは、決して他言しないわ。サワちゃんに幸せになってほしいの。サワちゃんとひろ子さんのゴールを心から祈っているのよ。仲人は、私たちに任せてちょうだい。約束ね。ところで、主人のこと、お父様によろしく言って下さいね。ほんの一年でもいいのよ。定年までに、一度でいいから、主人の晴れ姿を見たいのよ。沢富さん、お願いします。この通り」ナオ子は、両手を合わせてコクンと頭を下げた。

伊達は、あまりにもあからさまなお願いに恥ずかしくなり、心と裏腹なことを口走った。「おい、よさんか。サワが、困った顔をしてるじゃないか。俺は、もう、出世の夢はあきらめた。健康で、定年を迎えることができればそれでいい。ナオ子、分かってくれ。サワを困らせるようなまねはよせ」沢富は、弱みを握られたてまえ、やむなくうなずいてしまった。「分かりました。親父に、先輩のことをお願いしてみます。僕の方が及ぶかどうか分かりませんが、ご夫妻への恩返しは必ずします」

ナオ子は、目を輝かせて、沢富の右手を握り締めた。「うれしいわ。主人のこと、よろしく伝えてください。ぼんやりしているようでも、主人は、やるときは、やるんです。お父様に恥をかかせるようなことは決してしないわ。ねえ、あなた」伊達も沢富が口添えしてくれると聞いて、パッと目の前が明るくなった。「命を捧げる思いで、職務を全うするさ。よろしく頼む」伊達も両手を合わせて頭をコクンと下げた。

隠し子

二人にお願いされ恐縮してしまった沢富は、話を変えることにした。「とにかく、話はして見ます。でも、あまり期待はしないでくださいよ。ところで、ひろ子さんの気持がはっきりしないんですよ。僕は、結婚対象じゃないんですかね。女性の気持は、僕にはよくわかりません」待ってましたと言わんばかりに笑顔を作ったナオ子は、即座に返事した。「そのことだったら、心配ないわよ。女性って、躊躇するものなの。イヤヨ～、ダメダメッて言って、抱きしめられたいものなのよ。思い切って、ホテルに誘えばいいのよ、ねえ～～、あなた」

あたかも付き合っているときにナオ子を強引にホテルに誘ったかのように言われた伊達は、顔を真っ赤にして返事した。「まあ、とにかく、何度もアタックすることだ。女性を口説くには、押しが一番だ。そこでだが、一度でも、ホテルに誘ったことは、あるのか？」すでにセックスをしていた沢富は、顔を真っ赤にして返事した。「まあ、誘ったというより、誘われたような、そんなんです」伊達は、目を丸くして念を押した。「おい、本当か。もう、やったのか？隅に置けないやつだ。人は見かけによらんとは、このことだ」

笑顔になったナオ子は、ひろ子の思いを憶測し始めた。「それじゃ、ひろ子さんは、本当に、サワちゃんのことが好きなのね。結婚する気はあるのよ。でも、何が気に入らないのかしら。何か結婚できないような理由があるのかしら」ナオ子は、ひろ子のことを考えたが、よくよく考えてみると、バツイチのタクシー運転手と言うこと以外は、ひろ子の素性についてほとんど知らないことに気づいた。「そう、ひろ子さんって、バツイチよね。子供はいるのかしら？」

伊達も同じくひろ子のことをほとんど知らないことに気づき、口をぽかんと開けて首をかしげた。ひよいと首を立てると甲高い声を発した。「もしかして、子持ちか？」沢富は最初に会ったころの会話を思い出したが、子供はいない、と言っていたような、いないような、あやふやな記憶しか頭に残っていなかった。「は～、バツイチとは聞いてますが、子持ちじゃないと思いますが、どうなんでしょうかね～。はっきりとは、分かりません」

伊達は、子持ちを隠しているんじゃないかと邪推した。「もしかして、子持ちじゃないか。だから、結婚に踏み切れないんだ。きっと、そうだ。間違いない」ナオ子も夫の憶測が当たっているような気になってきた。「もしかして、もしかね。子持ちかもね。そうだったら、サワちゃん、どうする？それでも、結婚する気ある？」沢富は、青天の霹靂の事態に開いた口がふさがらなかつた。

ナオ子は、呆然と白目をむいた沢富の顔を覗き、声をかけた。「サワちゃん、しっかりして。まだ、子持ちと決まったわけじゃないし。確かめてみなさいよ」沢富は、われに返り返事した。「え、僕が？そんな勇氣、ないです。もしもですよ、子供がいる、と返事されて、僕は何と言って答えればいいんですか？子持ちと結婚する勇氣はありません。僕は、どうすりゃいいんですか？」

ナオ子は、右横の夫を見つめ小さくうなずいた。「そうよね、もし、子持ちだとしたら、サワちゃんだって、考えちゃうわよ。あなた、どうかしら、私が何気なく聞いてみようかしら。そうじゃないと、サワちゃん、このままだと気の毒だし。それに、子持ちだったらよ、仲人のことも水の泡になるじゃない。このようなことは早めに確かめるべきよ。そう思うでしょ、サワちゃん」

沢富の気持は揺らいでいた。確かに子持ちかどうか知りたかったが、万が一、子持ちだと分かったとき、どう対処していいか分からなくなっていた。確かに、ひろ子は好きだったが、突然、父親になる自信はなかった。それかといって、子供がいるなら結婚できない、なんて口が裂けてもいえそうになかった。考えれば考えるほど、沢富の頭は混乱した。「どうすればいいんだ。事実を知るのが怖いんです。あ～～、死にた～い」

伊達夫妻もどうすることがベストなのかまったく分からなくなった。「そうよね、万が一、子持ちだったと考えると、サワちゃんの立場はどうなるのかしら。いまさら断りにくいしね。それかといって、我慢して結婚しても、うまくいかないような気もするし」伊達は、ポジティブに考えるほうが、幸運が転がり込んでくるような気がした。「おい、子持ちって、分かったわけじゃないんだ。俺たちの勝手な邪推に過ぎないじゃないか。きっと、独り身だと思うよ。サワ、事実をしっかり受け止めてはどうか。結婚するかどうかは、それから考えてもいいじゃないか」

ナオ子も子持ちだと決め付けてしまっていたように思えた。事實は、変えられるものでない限り、事實を確認し、その事實を受け入れるべきだと思った。万が一、子持ちであれば、そのときはそのときで、じっくり考えればいいと思えた。なんとなく、早合点してしまったことに恥ずかしくなった。「そうね、事實は変えられないし。事實から逃げ出すわけには行かないのよ。サワちゃん、腹をくくって、事實と向き合うのよ。結婚は、それから考えればいいわ。何も、無理をして結婚することはないわ」

沢富は、両手の指を立てて、ガサガサと頭をかきむしった。沢富は、心の中で、子持ちじゃありませんように、子持ちじゃありませんように、と何度も叫んだ。だが、ガクンとうなだれると、事實を怖がっている臆病な自分がつくづく嫌になった。頭をすっと持ち上げると、清水の舞台から飛び降りる覚悟で語気を強めて、話し始めた。「そうです。そうなんです。事實は、事實です。逃げていても、未来は、開けないんです。分かりました。勇気を出して、直接、僕が確認します」

伊達夫妻は、目を丸くして見詰め合った。ほんの今まで、悲鳴を上げていた気弱な男の豹変振りに、度肝を抜かれた。ナオ子は、沢富の気持を確認した。「え、サワちゃん、いいのね。自分で、確認できるのね。たとえ子持ちでも、腰を抜かすんじゃないわよ。いい」沢富は、今言った自分の言葉を撤回できず、呆然とした顔で、うなずきつぶやいた。「やります。やってみます。もしかして、気絶するかも」

ナオ子は、強がっている沢富のことが心配になった。気の弱い沢富のことを考えると、ひろ子の前に立てば、口をしっかりと閉じた貝のようになり、一言もしゃべれないと思えた。「サワちゃん、そんなに無理はしないでいいのよ。仲人を申し出た限り、先方の素性を調べるのは、私たちの役目なの。サワちゃんは、気を楽にして、朗報を待っていてちょうだい。ねえ、あなた」伊達も、大きくうなずき、放心状態の沢富の左肩をポンと叩いた。

魂を抜き取られたように呆然としてしまった沢富は、結婚したいと思った自分に嫌悪感を抱いた。沢富には、本来、結婚願望はなかった。なぜか、ひろ子と出会って、突然、結婚願望が起きてしまったのだった。冷静になってきた沢富は、ひろ子のことを考えてみたが、ひろ子の素性をほとんど知らないことに気づき、そんな自分にあきれてしまった。知っていることを拾ってみると、YESタクシーの運転手、バツイチ、カラオケ女王、こんなことぐらいしか思い浮かばなかった。

ひろ子のことを考え始めると、猜疑心が膨らみ始め、バツイチまで疑い始めてしまった。沢富は、ポツリとつぶやいた。「本当に、バツイチなんですかね」それを聞いたナオ子も、いろんな疑問が頭の中を駆け巡った。「仲人の私たちが、もっと、ひろ子さんの素性を調べるべきだったわね。バツイチなのか、バツ二なのか、正式に離婚しているのか、なぜ、離婚したのか、子持ちなのか、どこに住んでいるのか、別れた亭主はどんな仕事をしていたのか、仲人として、うかつだったわ。ごめんなさい、サワちゃん」

落ち込んだ表情で謝ったナオ子の罪悪感に満ちた声を聞いて、沢富のほうに罪悪感がさいなまれた。「そんなことはありません。伊達夫妻には、何の落ち度もありません。すべては、僕の責任です。結婚するのは、僕なんですから。ひろ子さんのことを自分なりにもっと知るべきだったんです。腹をくくって、ひろ子さんとじっくり話し合ってみます。ひろ子さんも、伝えたいことがあるはずですよ。自分の将来のことは、自分でやります。心配しないでください。気絶しないように、祈っていてください」

伊達夫妻は、見詰め合って、大きくなずいた。ナオ子は、小さな笑顔を作って、激励した。「よく言ったわ。それでこそ、男よ。サワちゃんの結婚だもの。サワちゃんが納得いくまで、話し合うといいわ。あ、もうこんな時間。どうする、サワちゃん、泊まっていてもいいわよ。今夜は、酔っ払って、ぐっすり寝るといいわ。思いっきり、飲みなさい。ねえ、あなた」伊達もコクンとなずいた。

沢富も今夜は飲まずには眠れそうになかった。頭は混乱し、胸はモヤモヤして、ワ〜〜、と大声で叫びたい気持だった。「それじゃ、今夜は、泊まらせていただきます。少し、酔っ払ってもいいですか。今夜は、飲まずに眠れそうにありません」ナオ子は、即座にうなずき、どうぞ、どうぞ、と返事するとキッチンのフレンジにかけていった。二本のビンビールをテーブルに置くと、ナオ子は、夫に声をかけた。「あなたは、ほどほどにね」

女性工作員

お酒に弱い沢富は、二本のビールを飲み終わると気絶したようにテーブルにうつぶせになってしまった。ナオ子は、叩いても起きない沢富を夫の書斎で寝かせることにした。沢富を寝かせつけると二人は、キッチンに戻ってひろ子の素性について話し始めた。「あなた、ひろ子さんって、いったい何者かしら？単なるバツイチ運転手かしら。サワちゃんの結婚相手にふさわしい女性だといいんだけど。叩けばほこりが出るっていうじゃない。わたしたちの方でも調査した方がいいかも。私立探偵に、依頼してみましようか？」

伊達は、ひろ子について、いくつか腑に落ちない点があった。「俺は、少し気になることがあるんだ。ひろ子さんの態度がどうも気になる。サワをホテルに誘ったということは、一般的に考えて結婚の意思があると思われるよな。でも、サワのプロポーズに一向に返事しないというのが、どうも腑に落ちないんだ。ひろ子さんは、もしかして・・・」ナオコは、意味深な言葉が気になり、即座に、問い返した。

「あなた、何よ、もしかしてって」伊達は、腕組みをして、目をつぶった。しばらく、沈黙していたが、目を開くとゆっくり話し始めた。「あくまでも、邪推と思って聞いてくれ。今、日本人のCIA工作員が増加しているという噂なんだ。警察内部にもかなりCIAが潜んでいるという噂だ。そこでなんだが、あくまでも、邪推だぞ。まさかとは思いますが、ひろ子さんが、そのまさかってことはないかと？」

ナオ子は、マジな表情で問い返した。「ひろ子さんが、工作員ってこと？そういわれると、そんな気がしないでもないわ。刑事のサワちゃんを誘ったってことを考えると、そう、考えられないことはないわね。体を張って、サワちゃんから、警察内部の情報を取ろうとしたのかもよ。あなた、もし、そうだったら、どうなるのかしら、サワちゃん、悲劇じゃない」伊達は、とんでもない邪推をしたことに後悔したが、決して、妄想とは言えないような気がして、考えこんでしまった。

広島出身のナオ子に話すべきかしばらく躊躇していたが、両手で両ほほをバシッと叩くと、意を決して話し始めた。「ここだけの話だぞ。決して、誰にも話すんじゃないぞ。今月、大統領が広島平和記念公園を訪問する。それで、戒厳令が敷かれているんだが、今回の広島訪問で事件が起きるんじゃないかと警察は懸念しているんだ。何事もなく、広島訪問がなされればそれでいいのだが、どうも、何か起きそうな悪い予感がする。もしかするとだな～」

ナオ子は、またしても、夫の意味深な話にモヤモヤし始めた。「あなた、もしかって、いったいどういうこと？何が起きるといふの？まさか？」伊達は、ナオ子の意味深な言葉にモヤモヤしてしまった。「おい、まさかって、いったいなんだ。いってみろ」ナオ子は、一瞬ニヤっとして話を振った。「あなたこそ、もしかって何よ。あなたが先に、言いなさいよ」夫は、一瞬、言葉に詰まったが、邪推を話すことにした。

「ジョンFケネディーの二の舞が起きるんじゃないかと思っているんだ。今回の大統領の来日は、どうも、におうんだな～」同じことを考えていたナオ子は、う～～、と犬が怒った時のような声を出して、ゆっくりうなずいた。「あなた、私も、同じ。きっと、何かあるわよ。大統領を狙った何か？」夫は、うなずき、さらなる邪推を話し始めた。「あくまでも、ここだけの話だぞ、いいな」

ナオ子は、他人の不幸は我が家のご馳走と思い、目を輝かせてうなずいた。「事件を画策しているのは、CIAに違いない。そして、実行するのは、日本人の工作員だ。しかも、その工作員は女だ。言いたいことはわかるだろう」夫は、正面のナオ子の目をじっと見つめた。ナオ子は、女とはひろ子のことだと思い、大きくうなずいた。「最悪の邪推だと思うけど、あり得るかもね」

ブルブルっと身震いした夫は、邪推の根拠を話し始めた。「きっと、CIAは事件を起こす。日本で事件が起きれば、日本を悪く世界中に報道できるじゃないか。そうやって、日本を悪者にして、沖縄米軍基地の存続を正当化したいに違いない。ナオ子は、張り子の虎のように、何度も首を上下させた。「なるほど～。そんな魂胆が・・・CIAだったら、やりかねないわね。北朝鮮とISを陰で動かしているのは、CIA だものね。あなた、どうすればいい？」

夫は、どうすればいい、と問われて、眉をひそめた。「おい、単なる邪推じゃないか。あまり、深刻に考えるな。でもな～。実行犯が、彼女だと考えると、サワが気の毒になるよな～。こんなことを考えるのは、縁起が悪い。今の邪推は、きれいさっぱり、忘れよう。いいな、ナオ子」ナオ子は、邪推の世界に入り込み、出られなくなっていた。「あなた、不吉な予感がするのよ。ほら、私の不吉な予感って、当たるじゃない」

夫は、ナオ子の予感が当たるのをたびたび経験していた。「おい、こんな話をした俺が、バカだった。ナオ子、忘れるんだ。今の話は、サワにするんじゃないぞ」ナオ子は、ゆっくりうなずいたが、真っ黒い竜巻のような悪い予感が、善良な心を粉碎するかのよう心の中で暴れ始めていた。「あなた、もうダメ、黒い雨のような怨霊が降ってきたわ。あ～～、人が燃えてる、助けてあげないと、あなた、早く、あ～～」ナオ子は、突然、ヒャ～～、と悲鳴を上げると、バタンと気を失って床に倒れこんだ。

夫は、気を失ってボタンと倒れたナオ子を見て、ワ〜と悲鳴を上げて飛び上がった。「おい、気を確かにしろ。もう、忘れるんだ。ナオ子」素早く駆けよった夫は、死んだように床でぐったりしたナオ子をしっかりと抱きしめた。白目をむいたナオ子の口からは、原爆で犬死した子供たちの怨霊がとりついたかのように、助けて〜、助けて〜、水〜、水〜と今にも死に絶えそうな乾ききった声が漏れていた。「おい、気をしっかりしろ。大丈夫か？」夫は、ナオ子をお助けください、お助けください、と神に祈りながら、ナオ子を全力で抱きしめ続けた。

謎の女性

美緒と付き合ったことで伊達夫妻に迷惑をかけたことを深く反省した沢富は、覚せい剤取引に関する調査を断念することに決めた。病院で急死した栗原隆治に関する情報から、何らかの手がかりがつかめると考えていたが、ひろ子に美緒との関係がばれて、結婚が破談になる恐れがあると考えると、これ以上、事件に深入りするのは賢明でないと判断した。美緒と会うのは今回が最後にすると決意した沢富は、いつものマックで美緒にその気持ちを告げることにした。

5月22日（日）、午前10時40分にはマック前原店に到着した美緒は、オレンジジュースを購入すると、いつもの窓際の席に腰かけて沢富を待った。沢富もどうにか約束の11時には間に合った。沢富は、窓際の席までかけていくと、美緒が笑顔で声をかけた。「車、混んでたの？」沢富は、ハ〜ハ〜と息を切らせて返事した。「ちょっと、混んでたよ。今日はいい天気だし、糸島方面に行く人たちが多くて。今人気の伊都菜彩の前は、すごい、車列」ニコッと笑顔を作っていたが、美緒の頭は、今日のドライブコースのことを考えていた。

美緒は、一息ついた沢富の浮かない表情が気になったが、今日のドライブについて話し始めた。「ね～、今日のドライブ、三瀬方面はどう？三瀬の蕎麦は、すっごくおいしいんだってよ」沢富は、このままドライブに行ってしまうと、別れ話ができなくなるような気になった。気持ちが固まっているうちに、別れ話を切り出すことにした。「そうだな～。でも、今日は、ちょっと、大切な話があるんだ」

もしかして、別れ話ではないかと直感した美緒は、少し、わがまますぎたんじゃないかと反省した。今まで機嫌よく付き合ってくれた恩返しに、今まで黙っていたことを話すことにした。「かなり、刑事さんを引っ張りまわしちゃったね。今朝起きたときに、突然思い出したんだけど」美緒は、ストローに口をつけてジュースを吸い始めた。沢富は、もしかしたら、大きな手掛かりをつかむことができるんじゃないかと興奮してきた。「え、どんなことだい。どんなに些細なことでもいいんだ、話してくれないか」

巨乳に息を吸い込むように大きく深呼吸した美緒は、ニコッと笑顔を作った。何か思い出すときの表情になると、ゆっくり話し始めた。「真っ青な空に、何かが飛んでいたの。それがだんだんと近づいてきて、すぐそこまでやってきたの。一瞬、空飛ぶ円盤かと思ったんだけど、でも、よ～～く、見てみると、黄色いタクシーなの。あ、お父さんのタクシー、って叫んだ時、目が覚めたの」真剣に聞いていた沢富は、拍子抜けしてしまった。

「それって、夢の話だろ。今朝起きたときの話を聞かせてくれないか」美緒は、また、ニコッと笑顔を作った。「そんなに、焦らせないでよ。だから～、夢から覚めた時、突然、あの時のことを思い出したの」あの時と聞いた沢富は、身を乗り出した。「え、あの時、あの時のことって、さあ」美緒はじらすように、ストローに口をつけて、チュ～っとジュースを吸い上げた。しばらく黙っていた美緒は、一度窓から通りを眺めて、小さな声で話し始めた。

「確かに、あの時、言ったのよ。電話の相手は、職場の女性、って」沢富は、いったいどういうことだかさっぱりわからなかった。「どういうことだ。もう少し、僕にもわかるように話してくれないか。もっと、しっかり思い出して、どんなに些細なことでもいいから、さあ」美緒は、一瞬のフラッシュバックで、なんといって説明していいか、戸惑ったが、とにかく、思い出せることを順序立てて話すことにした。

「う～～、なんといっていいか、いつだったかは思い出せないけど、とにかく、食事中に、父の携帯が鳴ったのね。そして、父がこそこそと話をしたの。分かった、分かった、とか言ってたよ。はっきりしないんだけど。会社の人から、って聞いたら、ああ、って言ったの。一瞬、女性のような声が聞こえたので、女の人？って聞いたの。そしたら、ああ、って言ったの。それだけ」

沢富は、ある時、ある女性から、栗原隆治に電話があったという事実をつかんだ。そして、女性タクシードライバー、女性タクシードライバー、と心でつぶやいた時、ふと、ひろ子の顔が頭に浮かんだ。YESタクシーの女性ドライバーは、二人しかいない。ひろ子ともう一人の50歳ぐらいの女性。突然、マジになった沢富は、美緒を睨み付けるような目つきで質問した。「その女性って、若い声じゃなかったか？」

美緒は、はっきりしないような表情で、曖昧な返事をした。「それが、ほんの一瞬、女性のような声を耳にしたってだけで、若いかどうかは・・・でも、なんだか、女っぽく、きれいな声だったような、そんな気がする。なんとなくよ」沢富は、確信した。電話の相手は、ひろ子だと。もしそうであれば、ひろ子も、覚せい剤取引のグループの一人と考えてもおかしくない。

あくまでも、単なる邪推に違いないが、刑事は疑ってかかるのが仕事だ。たとえ、プロポーズの相手でも、私情を挟んではいけない。沢富は、左手を顎に当て、どうやって、ひろ子の素性を確かめればいいのか、しばらく考え込んでしまった。突然考え込んでしまった沢富にいったい何が起きたのだろう、と美緒は思った。何か悪いことでも言ったのではないかと少し不安になった。

美緒は、恐る恐るいつものかわいいニックネームで沢富に声をかけた。「サワピ～、どうかした？」考え込んでしまった沢富の耳には、美緒の声が届いていなかった。突然、沢富の脳裏には、真っ暗なトンネルの細い道を小さな懐中電灯で足元を照らし、寂しそうな後ろ姿で歩いている自分が映し出されていた。勇気を振り絞って、どんな手を使ってでも、徹底的に調査すべきではないか。沢富は心でつぶやいた。

トンネルの中に甲高い音が響いたと思った時、ふと、我に返った。「サワピ～、サワピ～ったら」美緒は、沢富の左肩をゆすっていた。沢富は、顔を持ち上げ美緒の顔を見つめた。「え、何か？」呆れた顔で美緒は答えた。「何か、じゃないでしょ。これから、どこに行くのよ。お昼は、おそばを食べたいな～。実は、おいしい蕎麦屋を知っているんだ。行こうよ～。さあ～、早く～」

我に返った沢富は、別れ話を切り出す前にもう少し謎の女性について聞き出すことにした。「もうこんな時間か、おなかがすくはずだ。食事に行く前に、もうちょっと話を聞かせてくれないうか。その女性についてもうちよつと知りたいんだ。お父さんは、女性と会ったりしてなかったんだろうか？いや、とにかく、お父さんとの会話で、思い出せることだったらなんでもいいんだ。厄介なお客だったとか、愉快なお客だったとか、独り言でもいい、何か思い出せないか？」

しかめっ面になってしまった美緒の口から、ため息が漏れた。そして、頭の記憶にノックし始めた。「ハ～～、そんなに、せかせられても、父は無口だったから。仕事のことは、ほとんど、家では話したことがなかったし。話といえば、ゴルフのことぐらいだったかな～。あ、いつだったか、夏のもっとも暑かった日だったような。汗をかいて帰ってきた時だった。ゴルフの練習をやったの、って聞いたの。その時、ああ、と言って風呂場にかけて行った。そう、その時、確かに、香水の匂いがした」

ひろ子の趣味は、カラオケとゴルフだったことを思い出した。その香水の匂いは、ひろ子のものではないかと思った沢富は、目を輝かせ、質問を続けた。「お父さんが特定の女性と付き合っていたとかは？」美緒の表情は、さらに険しくなった。「そんなことを言われても、父のことは、よくわかんないの。再婚する気もなかったようだし。家に、女性を連れてきたこともなかったし。おなか、すいたな～」美緒のおなか、グ～～となった。

ひろ子も覚せい剤取引にかかわっていたと考えれば、栗原と一緒にゴルフに行っていたと考えてもうなずける。また、そこで、栗原と何らかの極秘の打ち合わせをしたと考えられる。ひろ子の素性を徹底的に探してみるか、と思った時、グ～～っという鈍い音が耳に入った。少し怒ったような口調で美緒が声をかけた。「もう、いいでしょ。早く、蕎麦屋に行こうよ。おなかになってるし。早く」沢富は、ひろ子との結婚を考えて、別れ話を切り出すつもりだったが、予定を変更することにした。

「分かった。今日は、ありがとう。早速、美緒、おすすめのおいしい蕎麦屋に行ってみよう。道案内、頼む」美緒の顔に笑顔が爆発した。「ヤッタ～、うれし～、三瀬方面なの。道案内はまかせて」二人は、ハスラーに飛び乗り、国道を天神方面に向かった。産の宮を右折して南下し、大野城線に突き当たると左折して、末永交差点を右折した。くねくねした糸島峠を越えると三瀬トンネルを通り抜けて三瀬峠をひたすら走って行った。

運転中でも、沢富の頭は、蕎麦のことよりひろ子のこと頭がいっぱいだったが、美緒の声で意識は目の前の看板に向けられた。「あそこ、小さな看板に、無声庵、って書いてあるところ。そこが入り口」沢富は、急ブレーキをかけて徐行した。小さな入り口をゆっくり左折すると、左側に5台ほど止められそうな小さなパーキングがあった。「ここでいいんだな」沢富は、白のBMWクーペの横にハスラーを止めた。

店の中に入るとBMWの客人と思われる中年の夫婦が窓際のテーブルで蕎麦を食べていた。勝手知った美緒は、沢富を案内するように角の窓際のテーブルに向かった。その時、窓際の中年男性は、何気に、二人をチラッと見た。そして、エビ天をくわえていた中年男性の目は点になり、蠟人形のように固まった。きっと、美緒のミニスカートからチラッと覗いた赤パンが目飛び込んだに違いなかった。

先に美緒が腰かけると沢富は彼女の正面に腰かけた。美緒は手に取ったメニューを開き、沢富の前に置いた。「私は天井セットにするけど」沢富は、メニューをろくに見ず、俺も、と言ってメニューを閉じた。美緒が笑顔を作り、ささやいた。「二人って、兄弟に見られてるかな～？親子って感じじゃないし。恋人同士にしては、不釣り合いだし。ま、いっか」

恋人同士にしては、不釣り合い、とはどういう意味だろうと沢富は思ったが、年齢のことだろうと自分勝手に思い、聞き流した。

注文を取りに来た女性店員は、笑顔で注文を取るとさっさとカウンターに引き上げていった。美緒は、二人がどのように思われているかにいつも興味があった。「恋人同士って、思われたんじゃない。サワピー、最近、若返ってるみたい。やっぱ、私と付き合ってるからよ。ここでは、恋人同士になりきって、楽しい話をしましょうね。サワピ～」美緒は、自問自答して納得してるようで機嫌がよかった。

「時々、この店に来てるみたいだね」にっこり笑顔を作った美緒は、うなずき答えた。「ここは、先輩のお母様のお気に入りの店なの。何度か、先輩のお母様に連れられて、食事したの」沢富は、先輩に興味がわいてきた。「へ～、先輩って、高校の？」美緒は、先輩のゆう子のことを話すことにした。ゆう子は、数学の出来が悪かったのか第一志望の国立大学は不合格だったが、第二志望の私立F大学英文科に合格し、自宅から大学に通っていた。「一つ上のゆう子先輩っていうんだけど、今年から大学生。そう、私、今、先輩のうちに下宿してるの。来年は、先輩と同じF大学を受験するつもり」

美緒の近況について、今初めて知った。父親を亡くし、どのような生活をしているか心配していたが、先輩の家に下宿していると聞いて、安心した。「へ～、よかったじゃないか。先輩から勉強も習えて、一石二鳥だな。頑張っ、合格するといいね」二人が話に没頭していると話を中断するかのよう、中年の女性店員が天井セットを美緒の前に置いた。店員は、美緒の内腿をチラッと覗き、カウンターに引き上げていった。

沢富も美緒のピンクの超ミニスカートが気になっていた。モリモリっと突き出した大きなお尻は、ミニスカートをさらに短くしていた。歩いていても時々赤パンが見えるほど短かった。ましてや、横座りをすれば、赤パンが丸見えだった。今流行りのミニスカートとはいえ、あまりにも煽情的と思えた。沢富は、ミニスカートのことを指摘しようかとも思ったが、オジン臭いと言われるのではないかと思い、そ知らぬ顔をしていた。でも、能天気な美緒の笑顔を見ていると、なんだか心の底でつぶやいてしまった。

あの時の中年女性店員の顔つきからして、一瞬固まった感じで、軽蔑したようなまなざしが見受けられた。おそらく美緒のミニスカートにあきれ返ったに違いない。見せパンという奴だろうが、ここまであからさまに見せるのは、いかがなものか。やはり、男にとっては、目の毒だ。俺もチラッと赤パンを覗き見ただけで勃起してしまった。でも、美緒は、男性にチラッとパンツを見せたがっているのかもしれない。

美緒は、満面の笑顔で沢富に声をかけた。「サワピ～、絶対、おいしいっていうから。特に、佐賀のお米は、最高だから。いただきま～す」美緒は、ざるそばのつゆの器を左手に取り、ワサビをほんの少しお箸の先でつまみ、ササツとかきまぜた。「サワピ～も、さあ」沢富も笑顔を作り、お箸を手にするると、天井の器を右手に取った。タレのついたご飯を一口食べた沢富は、初めて体験するまろやかな触感に感動した。「うまい、確かに、美緒の言う通り、こんなにおいしいごはん、初めてだ」

無心に蕎麦をすすっていた美緒は、ひょいっと顔を持ち上げ、ニコッと笑顔を作った。「そう思った。バリ、まいう～でしょ。福岡のお米もおいしいけど、佐賀のお米もおいしいのよね～。こんなにおいしいお米は、東京にはないでしょ。サワピ～、東京になんか帰らずに、ずっと、福岡にいなよ。住めば都っていうじゃない。田舎暮らしも慣れれば、最高だと思うんだけど。サワピ～」

田舎暮らしにも慣れてきた沢富は、糸島に引っ越してきてもいいように思えてきた。「そうだな～、空気のいい田舎暮らしもいいよな。東京は、楽しいけど、体にはよくないから。アメリカでは、東京オリンピックにボイコットしてるみたいだし。そうだよな～、放射能オリンピックだなんて、前代未聞だよ。一体全体、何を考えて、放射能に汚染された東京になんかに。さっぱり、理解できない」

美緒は、ぶつぶつぼやく沢富にお構いなく、エビ天にがつついていた。エビ天を引きちぎって、口をモグモグさせているとゆう子の笑顔が頭に浮かんだ。「サワピ～、今度、先輩を紹介するわね。チョ～、かわい～んだから。鼻の下をのぼさないようにね」沢富は、熊本地震による川内原発への影響を考えていたが、かわい～と聞いて、目をぱちくりさせた。「ほ～、そんなにかわいいのかい。楽しみだな～」

お茶をすすった美緒は、沢富のスケベ心を覗き見たかのように、ニヤツと微笑んだ。「興味あるでしょ。かわい～、ってもんじゃないんだから。グラドルよ。結構、有名なんだから、レオタード姿、ユーチューブで見たことあるかもよ」沢富は、グラドルと聞いて、ますます興味がわいてきた。「グラドル、レオタードね～～、ほ～～」沢富は、見たことがあるかもしれないと思ったが、はっきりとは思い出せなかった。

「ゆう子さんか、とにかく会ってみたいものだ。でも、美緒の先輩に、グラドルがいるとは、驚いた」美緒はもっとゆう子を自慢することにした。「グラドルで、ファッションモデルで、女優なんだから。きっと、すぐにTVドラマにも出れると思う。ゆう子先輩、チョ～～かわい～、ガンバ」沢富は、美緒の誇張に面食ってしまった。こんな田舎にグラドルがいるとは、夢にも思わなかった。二人は、食事を終え、すぐ近くのどんぐり村で遊んで帰ることにした。

焼身自殺

ひろ子の素性をあれやこれやと考えるようになってから、ますますひろ子のことが気になって、夜も眠られなくなった。ひろ子の素性を探る前に伊達に相談することにした。水曜日、仕事が引けるとサンセットロード沿いにあるイタリアンレストランに伊達を誘った。二見ヶ浦海岸を一望できるレストランは、目の前に夫婦岩を見ることができる小さな丘の上にあった。こんなに眺めのいいレストランに誘ったということは、このレストランでJKと食事をしたに違いないと伊達は思った。席に着いた伊達は、皮肉を言いた。「ほ～、いい店、知ってるじゃないか。ここでJKと食事したってことか」

伊達の一言に真っ赤になった沢富であったが、気を取り直して話を切り出した。「今日は、ちょっと、相談があるんです。ひろ子さんのことで」伊達も、一度、じっくりひろ子の素性について話し合いたいと思っていた矢先だったので、身を乗り出して返事した。「なんだ、ひろ子さんのことって」沢富は、何をどう、相談すればいいか迷ったが、とにかく、美緒から得た情報を報告することから始めることにした。「美緒から聞いた話なんですけど、どうも、栗原はある女性と時々ゴルフに行っていたようなんです」

伊達は、女性と聞いて、身を乗り出した。「ほ～、それで」沢富は、話を続けた。「その女性というのが、もしかして、ひろ子さんじゃないかと。というのはですね、ひろ子さんの趣味は、カラオケとゴルフなんです。どう思われますか？」伊達は、腕組みをすると唸った。「う～～、そうか。やっぱ、ひろ子さんは、ただものじゃないってことか」沢富は、問い返した。「ただものじゃない、それは、一体どういうことですか？」

伊達は、自分の邪推を話す決意をした。一度、沢富をじっと見つめると、話し始めた。「今から話すことは、あくまでも、俺の邪推だ。気を悪くするな」沢富は、きりっとした目つきで、ゆっくりうなずいた。「本当に、悪く思うな。ひろ子さんは、もしかして、職員かもしれない。ほら、耳にしたことがあるだろ、CIAが警察内部にもいるってことを。ってことは、一般人の中にもCIAが潜んでいるってことだ」

コクン、コクンとうなずいた沢富は、ひろ子が覚せい剤の取引にかかわっているとにらんでいたが、職員だという発想はなかった。思ってもいなかった邪推に度肝を抜かれた沢富だったが、二見ヶ浦海岸を窓越しに一瞥すると、伊達の顔をギョロっと睨み付けた。伊達は、喧嘩を売られるんじゃないかと、一瞬身を引いた。「そういう見方もあったんですか。職員ですか。そう考えると、覚せい剤取引ともつながってきますね。なるほど、覚せい剤取引を主導していたのは、ひろ子かもしれませんね」

伊達は、沢富が冷静な判断をしたことにほっとした。「そう思うか。そこでなんだが、覚せい剤取引のことはさておいてだな～。俺は気になっていることがある。今回の大統領の広島訪問だ」伊達は、眉間にしわを寄せた沢富の顔を覗き込んだ。大統領と聞いた沢富は、ポカンと口を開けてしまった。ひろ子の笑顔を思い浮かべた沢富は、伊達の言わんとすることがさっぱりつかめなかった。「いったい、どういうことですか？大統領とどんな関係が？」

伊達は、両手に拳骨を作り、顔を真っ赤にして、語気を強めてひとこと言った。「テロだ」沢富は、意外な言葉に固まってしまった。しばらく、なんといいいかわからず、頭が混乱してしまった。目をぱちくりさせ、一息すると言葉が飛び出した。「テロ、ですか。いったいどんな？」腹をくくった伊達は、邪推を口にした。「単なる俺の邪推だ。気を悪くするなよ。テロってというのは、大統領を狙った自爆テロ、じゃないかと思う。本当に、邪推だ」白目をむいた沢富の顔は、真っ青になっていた。

気絶しそうになったが、気を取り直して質問した。「自爆テロ。いったい、どうして、そんなことが言えるんですか？何か、根拠があるんですか？僕には、まったく、あり得ない話です」伊達は、自分の邪推を説明することにした。「いや、それが、ひろ子さんの出身を調べさせてもらったんだが。悪く思うな。すると、ひろ子さんは、長崎出身なんだ。もしかすると、ひろ子さんは、被爆者の子孫かもしれない」

沢富は、聞き耳を立てていたが、今一つピンと来なかった。「いったい、ひろ子さんの長崎出身と自爆テロとに、どんな関係があるんですか？」伊達は、さらに邪推を話し始めた。「おそらく、CIAは、工作員に自爆テロを指示したと思う。大統領の前で自爆を図れば、日本は世界中から非難を浴びるだろう。そこでなんだが、原爆を投下したアメリカを恨んでいた長崎出身のひろ子さんは、アメリカに復讐するために、自爆テロを引き受けたんじゃないかと思うんだ」

沢富は、あり得ない邪推にあきれ返ったが、あまりにも現実起きるような話し方をした伊達、恨めしくなった。「ちょっと、それはないでしょう。先輩の妄想ですよ。僕は、そういうことではなく、栗原とひろ子さんが、覚せい剤取引にかかわっていたと思ったんです。カラオケ女王のひろ子さんが、CAIの職員で、自爆テロの実行犯だなんて、それはないですよ。先輩、そりゃ～、ひどすぎりゃ～しませんか」

5月27日（金）の午後、大統領の広島訪問が戒厳令の中行われ、その模様がTVで全国に放映された。ハスラーの中で休憩していた伊達と沢富も7インチのモニターに釘付けになっていた。沢富は、独り言のようにつぶやいた。「何事もなければ、いいんですけどね～、先輩」伊達も、心の中では、何も起こらないことを祈った。「俺の邪推なんて、バカげていたよな。おい、見ろよ、大統領、いい表情してるじゃないか、ノーベル平和賞受賞するだけあるよな」

その日の午後11時のニュースで、広島平和記念公園で核廃絶を宣言する大統領のニュースが流れ、次に不可解なニュースが流れた。そのニュースとは、長崎での焼身自殺だった。翌日のニュースでは、焼身自殺を図った人物は、女性で身元は不明と報道された。そのニュースを聞くや否や、まさかと思った沢富は、何度もひろ子の携帯に電話したが、まったく、つながらなかった。そして、中洲の街に、タクシードライバーひろ子の姿は、二度と現れることはなかった。